

明治24年における中川視学官の 第二地方部学事巡視の研究

——その2・岩手県内の学校視察と演説——

麻 生 千 明

Chiaki Asoh

序

本稿は「明治24年における中川視学官の第二地方部学事巡視の研究」の「その2」として、宮城県巡視について考察した前稿⁽¹⁾に続き、中川視学官の岩手県における学校視察と演説について考察するものである。

1. 岩手県巡視の概況

5月22日から30日までの9日間に及ぶ宮城県巡視を終えた中川は、5月30日に石越停車場から汽車で岩手県の一ノ関に至る。翌31日は日曜日でもあったためか視察はおこなわず、翌6月1日から視察が開始され、以後6月20日までの20日間にわたって岩手県内の巡視がおこなわれる。ところで中川の来県については明治24年(1891)5月刊の『岩手学事彙報』に「文部省参事官中川元氏第二地方部担任の視学官に任せられ、本月五日頃巡視として来県せらるゝといふ」⁽²⁾と報じられているように、当初の予定では5月5日頃の来県であった。約1ヶ月遅れた事情については前稿⁽¹⁾で指摘したように、中川は4月23日に東京を出発、福島県の巡視を終えて4月28日に宮城県仙台に到着したが翌29日に急遽帰京、再び仙台に来たのが約1ヶ月後の5月21日で、当初予定より全体的に1ヶ月遅れの巡視となったことによる。なお仙台から急遽帰京の事情については「事故」⁽³⁾、「急用」⁽⁴⁾、「病氣」⁽⁵⁾など資料により表現がさまざまに判然としなかったのであるが、最近、ご令孫の中川浩一氏より手紙をいただき、「祖父が四月二十九日に帰京したのは、妻の千枝が危篤との電報が入ったからだと思います。翌三十日死亡と戸籍に出ています。」とのご教示をいただき疑念が氷解した。とともに、いかに公用とは言え、恐らく病床にあった妻を置いて長期間の巡視に出発した中川の心中が思い遣られた。

さて中川は今回、岩手県の山間部や海岸地方など僻地にまで足を踏み入れているが、まずそのことが注目されなければならない。基本的には「小学校令」実施のための地方状況の視察という今回の巡視目的⁽¹⁾からも、地方の実態を詳細に視察する必要があったであろ

うが、岩手県については「先に明治十五年中島大書記官巡視せられし以来、文部省官吏の出張を見ず、視学官の巡視は皆国道筋のみなりき」⁽⁶⁾とも報じられているように、そもそも中央の文部官僚の巡視自体が実に久々のことであり、かつ彼らの巡視は概ね国道筋の学校のみで、僻地に足を踏み入れることはなかったのである。『教育報知』の一投稿記事は「文部視学官タルモノハ都会地ノ教育ノミヲ注目セズ可及的広ク田舎僻陋ノ学事ヲモ観セラルベキヲ最モ必要ナルヲ信ズルナリ」⁽⁷⁾と要望しており、『教育時論』の論説は「今日の所謂視学なるものは真正の視学にあらず、一年に一二回、それも極り切つたる学校を巡視し、恰も走るが如くにして他に移り、偶々杓子定規の演説ある位に止れり。一時間や二時間位にて、学校の景況を悉くし、教育の情勢を詳にせんことは、何人と雖決して能くすべきことにあらざるなり」⁽⁸⁾と難じていた。そうした非難も背景にあったであろうし、中川自身、7月4日札幌で開催された北海道教育会常集会における演説で、今回は特に青森県と岩手県を重点的に視察する意向であったと述べているのである。⁽⁹⁾

ところで中川の岩手県巡視については、すでに中川浩一氏が考察されているので、⁽¹⁰⁾それら先行研究等をもとに中川の巡視概況を表に整理しておきたい。(表1)

表をみるとわかるように、中川は一ノ関から視察を開始、県南の東磐井郡、海岸寄りの気仙郡、そして再び内陸山間部の江刺郡と巡回したあと中心都市、盛岡に至る。そして盛岡市内の学校を視察、同地で開催の岩手教育協会で演説をおこなったあと再び海岸地方に向かい、中閉伊郡、そして東閉伊郡と視察し、海岸を北上、内陸部のいわゆる“日本のチベット”南九戸郡、北九戸郡に足を踏み入れ、そこから青森県に入るといのが大体の経路であった。以下、視察によって明らかにされた岩手県下の学校の実態として校舎施設、学校・学級編成、温習生や専修生の実態について、諸規則との関連において考察し(II)、次に盛岡で開催の岩手教育協会での演説について考察する(III)。

表 1. 中川視学官の岩手県における巡視概況

5・31 (日)	一ノ関に滞在 (一ノ関泊)
6・1 (月)	一ノ関尋常小学校、西磐井高等小学校、薄衣村好善尋常小学校、薄衣尋常小学校の授業を視察 (東磐井の千厩泊)
2 (火)	東磐井高等小学校と千厩尋常小学校を視察 (校舎は劣悪) (大原泊)
3 (水)	東磐井郡大原尋常小学校を視察 (唱歌不完全)。清川県属の随行で気仙郡に向かい、矢作村尋常小学校を視察 (放課後のため校舎のみ視察) (高田町泊)
4 (木)	高田町尋常小学校を視察 (校舎劣悪)。雨の中、盛町まで赴き出羽旅店に投宿、直ちに盛町尋常小学校各教室を一覧、次に気仙高等小学校の授業を視察。郡書記、高等小学校長等の発起により、盛町洞雲寺にて教育者懇親会。要請に応じて中川は「我国乃教育」と題して講話 (盛町泊)
5 (金)	盛町から日頃を経由、途中、田代簡易小学校を視察。世田米到着、世田米尋常小学校を視察 (世田米泊)
6 (土)	世田米を発ち江刺郡に入る。途中、路上より大股簡易学校校舎を見る。(伊手村泊)
7 (日)	伊手尋常小学校の授業を視察。近傍教員集会の席上、演説 (実物教育、規律、教員の心得などについて) (岩谷堂村泊)
8 (月)	岩谷堂尋常小学校の授業視察 (校舎不完全)、江刺高等小学校を1時間半ほど授業視察 (唱歌について注意)。江刺から水沢に出、鉄道利用で盛岡に至る。(盛岡泊)
9 (火)	岩手尋常師範学校、付属小学校、盛岡高等小学校を視察。(盛岡泊)
10 (水)	岩手尋常中学校、盛岡第一尋常小学校、盛岡第三尋常小学校、盛岡第二尋常小学校を丹念に視察、種々注意。獣医学校を一覧。岩手尋常中学校において岩手教育協会開催、中川も演説をおこなう。(中学校生徒のこと、盛岡市内小学校の授業批評、規律などについて) (盛岡泊)
11 (木)	盛岡出発、閉伊街道を騎馬にて宮古に向かう。(中閉伊郡門馬村泊)
12 (金)	中閉伊郡川井村にて3つの簡易学校 (川井、箱石、古田) を視察 (川井村泊)
13 (土)	宮古に向かう途中、刈屋尋常小学校、薺目尋常小学校 (単級学校)、千徳尋常小学校 (複式授業) を視察 (宮古町泊)
14 (日)	宮古尋常小学校、鉾ヶ崎尋常小学校、東閉伊郡高等小学校を視察。東閉伊高等小学校に於いて近傍教員等集会の席上、演説。(宮古町泊)
15 (月)	宮古から海岸線を北上、北閉伊郡に入り、田老村に至る。終日旅程 (田老村泊)
16 (火)	田老尋常小学校を視察。岩泉に向かう途中、摂待簡易学校にも立ち寄る。小本村到着、小本村尋常小学校を視察 (単級学校)。小本村にて昼食。岩泉に向かう。道中、馬上より乙茂簡易学校を見る。午後4時頃岩泉村到着。中村旅館に投宿。村長、教員たちと懇談 (学事の景況、民情、地方の物産など) (岩泉村泊)
17 (水)	岩泉尋常小学校を視察ののち岩泉出発。小本まで戻り、田野畑経由、海側をたどって普代村まで行く。終日旅程 (普代村掘打泊)
18 (木)	道順に沿って南九戸郡野田尋常小学校、宇部尋常小学校、久慈尋常小学校、南九戸高等小学校を視察 (久慈泊)
19 (金)	久慈街道を通り「日本のチベット」に入る。大野尋常小学校、小軽米尋常小学校を視察 (軽米泊)
20 (土)	軽米尋常小学校、北九戸高等小学校を視察 (軽米泊)

中川の『巡視日記』、『岩手学事彙報』より作成。

参考論文・中川浩一「文部省視学官中川元——明治二十四年・岩手県内学事巡視の足取りを追う——」(『茨城大学紀要 第36号』1987・3)

II. 中川の視察による学校と教育の実態

1. 校舎施設の実態

——「小学校設備準則」との関連——

(1) 隣県（宮城県）のモデル校（佐沼小学校）の参観紹介

明治24年（1891）7月刊の『岩手学事彙報』に宮城県の佐沼小学校の紹介記事がある。そこには「同学校は宮城県中にて第一の小学校の由にて、先達て中川視学官来着の折り大に其規模を称賛されたるにつき、岡井益太郎氏は田辺郡長の命により、参観に赴き…」⁽⁴⁰⁾（傍点引用者）とあり、中川視学官の称賛が同校参観のきっかけになったようである。前稿⁽¹⁾で述べたように、中川は5月29日に佐沼小学校を視察、『巡視日記』に詳細に記録しているが、その末尾に「○学校之事ハil beaucoup de progrès.頗ル見ルヘキ者アリ」と記していた。間にあるフランス語は「それは非常に進歩している。」との意である。なお中川は同日に登米小学校も視察、同校の様態を記録した末尾にフランス語でla maison d'école est neuve et bien tenue, et propre. devient meiller. mais beaucoup an dessous que celle de Sanuma aussi bien que l'enseignement.（訳、「学校の建物は新しく、手入れも行き届き、清潔である。より良くなっている。しかし佐沼のものよりはるかに劣っている。教育についても同様である。」）と記していた。登米小学校も立派な施設、建物であったが佐沼はそれ以上であると認めていたのである。

そうした経緯による岡井の参観であったが、参観当日はあいにく休日のため授業視察はかなわず校舎施設、備品の視察にとどまった。その紹介記事によると同校校舎は矩形二階造、日本風の硝子窓、全体が南向きで門は西側、東隅に寄宿舎と運動場が設けられ、敷地は長方形。生徒数は700名で普通科と別科とがあり、別科は「重に第二高等中学校の補充科に入学し得へきの程度」⁽⁴¹⁾で、教員は男女共で校長を除き11名、教育上の器具、標本類も算術教授器械、地理の教授器械、動植物剥製、干乾物など実に多く、それらは大体教員と生徒の自製にかかるものであり、修身書も同校校長の編集したものであったという。⁽⁴²⁾なお盛岡市においても「田鎖市書記、新渡戸高等小学校長の参観せんとて、其趣を同地へ通せし處、同地より当時は農事繁忙の爲め夏期休業繰り上げ休業中なれば、七月下旬ならては授業に取り付きましくと電報を以て返事ありしと、就ては二氏も其期に参観するよし」⁽⁴³⁾とあり、岩手県からの参観が相次いでいる。⁽⁴⁴⁾

佐沼と登米と涌谷の三校は、宮城県が明治16年（1883）7月に公布した「小学校建築心得」（乙第38号）

の規定による優れた学校建築と目されていたが、⁽⁴⁵⁾その「小学校建築心得」の概要を紹介すると、⁽⁴⁶⁾まず学校建築は「質素」「堅牢」「実用」を旨とし「虚飾」を排すること（第一条）、次に新築に際し「些少ノ経費ヲ嫌悪シテ之ヲ粗造ニ付スルトキハ永久ニ耐ユル能ハサルノミナラス追年補修等ノ為メ却テ利アラサルモノナリ故ニ可成的良好ノ材料ヲ用キ極メテ完全堅実ナル構造ヲ要スヘシ」（第二条）との規定は特に注目されよう。以下、校舎は衛生上の観点に留意すること、校地は生徒通学の便と「土地高燥風光ニ富メル所ヲ選定」すべきこと、敷地は長方形が望ましく、かつその広さは学齢100人に付き少なくとも250坪以上、そして100人毎に100坪増、学齢50人未満でも150坪を下回らないこと、校舎は学齢100人ある学区においては90人以上の生徒を収容しうること、校舎種別は木造、石造、練瓦造、平屋、二階、三階、また形は種々あるが「一字工字凹字回字形ノ平屋ヲ最良」とすること、その他屋根、窓、壁、教場、裁縫場、教員詰所、生徒控所、書籍室、小使詰所、便所、遊歩場、卓子椅子など詳細にわたって基準が示されている。それは明治24年（1891）4月に公布された「小学校設備準則」よりもはるかに詳細で基準も高い。ただし教室の広さについては「生徒ノ多少ニ関スト雖トモ幅三間長四間ノ教場トナシ其中二十人マテ容ルルヲ適当トス」（第十二条）と規定しており、その点は明治19年（1886）の「小学校ノ学科及其程度」により一学級生徒数が尋常科80人、高等科60人と規定され、それら学級単位の一斉教授に伴って求められる教室規模と異なるところである。

(2) 岩手県下の校舎施設の劣悪な実態

東北の中心である宮城県では、湧谷、登米、佐沼に代表されるように壮大かつ近代的な学校建築も少なかつたが、岩手県の場合は全く様相を異にし校舎設備は極めて劣悪であったことが中川の『巡視日記』からも窺える。例えば6月2日に視察した東磐井高等小学校は「校舎ハ借屋ニシテ製絲場ナリ」とあり、同日視察の千厩尋常小学校についても「校舎ハ大光寺本堂ヲ借りテ居ル」とある。翌6月3日視察した気仙郡矢作村尋常小学校も「校舎ハ寺ヲ借用シテ居ルー覽ス不完全ト認ム」と記されており寺院借用の校舎が目立つ。後三年の役後、清衡、基衡、秀衡の藤原三代の90余年間、平泉を中心に華やかな仏教文化を開花させた土地柄⁽⁴⁵⁾は学校校舎にも反映していたと言えよう。6月14日に視察した宮古尋常小学校については「校舎ハ元ノ粟倉にて陋倭極マレリ」と記されている。こうした仮校舎の場合、当然不備な点が多々あったと思われるが、

6月4日に視察した気仙郡高田町尋常小学校については「校舎頽壊壁落実ニ憐ムヘキ姿ナリ而シテ其当初ノ構造モ学校ニ適セサルモノナリ」と詳しく記されている。校舎の損壊とともにその構造が問題にされている。すでに中川の巡視の先立つ明治24年(1891)4月8日に制定されていた「小学校設備準則」(文部省令第2号)においては、校舎は「成ルヘク平屋造ナルヲ要ス」¹⁰⁾、校舎新築にあたっては「将来増加スヘキ生徒ノ員数ヲ見積リテ成ルヘク将来ノ増築ニ便宜ナル計画ヲ為シ又ハ成ルヘク予備ノ教室ヲ設クルヲ要ス」¹¹⁾、また教室の広さについても「其内ニ入ルヘキ机並坐席ノ数、大サ及排置方ニ応シテ之ヲ定メ生徒四人ニ付凡一坪ヨリ小ナルヘカラス」¹²⁾と規定されていた。某文部省参事官の談話によると「設備準則」を定めた趣旨は次の3点あった。第1は校舎は「決シテ外面ノ華美ヲ競フカ如キ弊ナク、常ニ堅牢耐久ナルヲ旨」¹³⁾とすること、第2には「何レノ土地ノ小学校ニテモ、小サナル教室ヲ数多ク設クルヲ常トスルカ如キ弊ヲ除キ、彼民力ノ薄少ナル土地ニハ、其土地ニ適当スル単級教授法等ヲ行フニ容易ナル教室ヲ備ヘシメ」¹⁴⁾ること。第3に書籍器具類の設備は過不足なきようなど「総テ小学校ノ設備ヲシテ教育上、衛生上、経済上ニ不利ナカラシメンコトヲ期スルモノノ如シ」¹⁵⁾ということであった。また「設備

準則」はあくまでも大綱にとどめるべきで、「中央政府ニテ餘リ細密ノ規定ヲ設クルハ不可」¹⁶⁾とも述べる。理由として第1に、わが国は学校校舎の構造に関する経験がまだ豊富ではないこと、第2に「我国ノ如キ延長一千里ニモ亘リ風土ノ候ノ頗ル相異ナル地方ヨリ成立スル大国ニテハ学校ノ構造法ノ如キハ、地方地方ニテ多少其趣ヲ異ニセサルヲ得ス」¹⁷⁾と国内の気候風土の差を考慮する必要を指摘している。

この「設備準則」に照らしてみた場合、岩手県下の学校校舎についての問題点は、まず教室の狭隘さにあったとみられる。上に出てくる「単級教授法」とは、中川が明治19年の巡視後にまとめた『復命書』にも出てくるが、¹⁸⁾したがって明治23年の「小学校令」によって法制上成立する「単級学校」の教授法という限定された意味ではなく、明治19年の「小学校ノ学科及其程度」に規定される一学級生徒数(尋常科80名、高等科60名)程度の学級を単位とする一斉教授法といった意味と解してよいであろう。したがって教室の狭隘さが特に問題として認識されたと思われる。それは特に山間僻地の学校に顕著であったであろうが、盛岡市内の比較的規模の大きい学校の場合も、次表に示したように教室の広さは必ずしも充分なものではなかったようである。¹⁹⁾

表2. 盛岡市内小学校の規模

学校名	教室数	坪数	平均坪数	生徒数	生徒/教室	生徒/教室坪数
高等小学校	12	190.0	15.8	587	48.92	3.89
第一尋常小	12	115.5	9.6	606	50.50	5.25
第二尋常小	11	123.5	11.2	611	55.54	4.95
第三尋常小	10	117.0	11.7	501	50.10	4.28
平均	11.25	136.5	12.2	576.3	51.22	4.50

(備考) 教室数の中に裁縫室、唱歌室は含まれていない。なお表中、第一尋常小の教室1、坪数12、第二尋常小の教室3、坪数13.5は明治23年の増築による。

校舎については衛生上の問題もあった。6月8日に視察した岩谷堂尋常小学校について中川は「校舎不完全ナリ故ニ新築ヲ勸ム町長之ヲ諾ス多分三ケ年ヲ期シテ成るべし」と『日記』に記しているが、雑誌報道にも同校視察の際中川は「校舎不完全にして授業及衛生に適せざるを以て改築すヘキ旨を町長に談せられ」²⁰⁾たと報じられている。明治19年(1886)の巡視の時であるが、江刺の近い水沢や前沢の学校を視察した中川は、当時の『日記』に「前澤学校ヲ一覽シ夫方車ヲ馳セテ水澤に到リ水澤学校ヲ一覽ス何レモ不完全ノ観アルニ付夫々郡長へ談示シ置ケリ…夫方又同所(黒沢

尻…引用者註)之学校ヲ一覽ス甚以不潔不完全なり…本日ハ学校之悪敷為メニ気分モ悪シクアリタリ」(明治19年7月7日)と記していたが、そうした状況はさほど改善されていなかったと思われる。「小学校設備準則」には「校地ハ日当リ好ク且ツ成ルヘク開豁乾爽ナルヲ要ス 校地ハ喧鬧ニシテ授業ノ妨アル場所、危険ナル場所、道德上嫌忌スヘキ場所、停滞セル池水其他凡テ悪臭アリ若クハ衛生上ニ害アル蒸発気ヲ生スル場所ニ接近スヘカラス 校地ヲ扱フニ方リ衛生上ノ利害明ナラサルトキハ医師ノ意見ヲ聞クコトヲ要ス」(第1条)²¹⁾など衛生上の観点も出ており、学校衛生も重視さ

れていくが、岩手県下の校舎施設は衛生という点でも憂慮すべき実態であったようである。宮城県においてもみられたが、岩手県においても「生徒掃除ス」(6月1日 薄衣尋常小学校)、「生徒掃除ス」(6月2日 東磐井高等小学校)と『巡視日記』にあるように、生徒による学校掃除の励行がみられた。学校掃除については、規律養成や学校経済などの意義づけもなされたが、劣悪な衛生状態という背景要因をも見落としてはならないのではなかろうか。

(3) 「小学校設備準則」の改正とその背景

「小学校令」実施のための地方の状況視察という今回の巡視目的において、中川は校舎施設に関しては「小学校設備準則」に照らして視察がなされたと判断される。ところでその「設備準則」は同年11月17日改正される。まず全文16カ条であったものが、わずか4ケ条という簡略なものとなる。すなわち4月の「準則」では校地の条件(第1条)、ご真影、勅語奉置場所の一定化(第2条)、校舎(第3条)、教室の広さ(第4条)、講堂、物置、特別教室(第5条)、体操場(第6条)、農業練習場(第7条)、掘井戸、水道(第8条)、便所(第9条)、教員住宅、菜園(第10条)、校具(第11条)、机、腰掛の構造(第12条)、校舎、校具などは地方の状況を斟酌すべきこと(第13、14条)、掃除、保存に関すること(第15条)、規則中、新築、新調の際でないと適用し難いものはその時まで猶予すること(第16条)などの詳細なものであったが、11月の改正「準則」では校地(第1条)、校舎、教室、教員住宅(第2条)、校具(第3条)、体操場(第4条)とわずか4ケ条となる。ご真影や勅語膳本の奉置場所の一定化を規定していた旧第2条は「設備準則」に規定する性質ではないとの理由から別規則に規定されるが、それ以外の部分については特に校舎や教室などについて詳細に規定していた第3条から第10条の部分が大幅に簡略化された形になっている。変更内容を逐条みていくと、第一条は校地の条件について旧規則では教授上、道徳上、衛生上の観点からやや詳しく規定されていたのが、教授上の観点は省かれ、ただ「道徳上並衛生上害ナク」¹²⁾となり、それに「児童ノ通学ニ便利ナル場所」¹³⁾という条件がつけ加えられている。人家まばらで一般に通学不便な地方の実状が考慮に入れられたものと考えられる。第二条は校舎、教室、教員室に関してで、旧規則にみられた詳細に基準をすべて省き「学校ノ種類学級ノ編制児童ノ数等ニ応ジ」¹⁴⁾必要な数と広さの教室と教員室を備えるべきということとどめ、その以上の質的要件に関する規定はすべて省いた形である。さらに

その上に「便宜ノ地ニ相当ノ建物アルトキハ之ヲ校舎ニ充用スヘシ」¹⁵⁾ともつけ加えている。それは校具について規定した第3条についても同様である。体操場について規定した第4条は旧規則では「成ルヘク校舎ニ傍フテ」とあった部分を省き単に「危険ノ處ナキ場所」¹⁶⁾となっている。

要するに11月の改正は、4月の規則に比べて明らかに基準の後退であり、現状への妥協という性格のものとなっていると言えよう。その背景には「校舎ノ建築ハ主トシテ学校経済ニ注意シ授業上管理上衛生上等ノ便ヲ図リ務メテ外觀ノ虚飾ヲ去リ質朴堅牢ニシテ土地ノ民度ニ適合シタルモノタルヘシ」(第2条)¹⁷⁾とあるように「学校経済」「民度」の強調であり、そのことは「設備準則」に付された「説明」文にも「本年四月文部省令第二号ヲ以テ制定シタル小学校設備準則ハ頗ル周密ニシテ其希望スル所設備ノ完全ヲ求ムルニ在リ又都鄙貧富ノ別ヲ酌量スルノ精神ニ乏シキカ故ニ實際ノ情況ト民力ノ程度トニ適セス」¹⁸⁾とあることから明らかである。そして教育の普及、道徳教育、国民教育の基礎を固めるためには特に善良な教員の任用、待遇の改善こそが必要であり、それをさしおいて校舎施設に多大な費用を投ずべきでないとの趣旨である。すなわち「此ノ如ク教育上必須避クヘカラサルノ費用アリテ之ヲ支弁セサルヘカラサルニ尚且学校ノ設備ヲモ併セテ一齊ニ完全ナラシメントスルハ国徳民情ニ照ラシテ到底之ヲ実行シ能ハサルヘシ サレハ校舎ノ如キハ相当ノ建物アリテ教授上ニ差支ナキモノハ之ヲ充用セシメテ必シモ新ニ建築ヲナサシメス而シテ若シ其建築ヲ要スルニ当リテハ務メテ外觀ノ虚飾ヲ去リテ宜シク其土地ノ民度ニ適応セシメンコトニ注意スヘキナリ」¹⁹⁾と述べているのである。

要するに11月の改正は、土地の民度(経済力)に相応した、児童収容に見合う校舎設備ということで、民度を越えていたずらに建物の壮麗華麗さを競う風潮を厳に戒めるものであった。たしかに「…府県に依りては間々徒に多額の寄付金を召集して、校舎の建築に華美を極め、唯外觀の華奢を誇りて、講堂の位地又構造等は、日当り好く、且つ講師の講読に際して、其声音の生徒の耳底に達する工合杯は果して其宜しきを得たるや、空氣の疎通は如何、其他総て衛生上に顧慮せざるのみならず、其校舎の壮麗高層を誇らんか為めに、地方に依りては二階は愚か三階以上の建築に無用の経費を消費…」²⁰⁾と報じられるような状況も一部にはみられたであろう。しかし考察してきたように、中川が視察した第二地方部、とりわけ岩手県の実状はまさに基準以前の極めて劣悪な実態であった。11月の改正が、

そうした現状への妥協であるとすればあまりにも理想追求の姿勢を放棄してしまっていると批判されなければならないであろう。

ところで「小学校令」が公布された明治23年から、その実施のための諸規則が制定される24年にかけては文部省内にも意見の対立などもあり、方針にもかなりの変更があったことが指摘されている。⁹⁰その主要因は文部省内の大幅な人事移動、とりわけ短期間に普通学務局長が服部一三、江木千之、久保田譲と代わったことであった。大木文相のもと抜擢起用された久保田譲は長く会計業務に携わり、教育財政を研究してきた人物であり、経済の観点から公教育を構想する現実主義者であったことが、小学校令の実施、諸規則の制定において現実主義的方向に転換していく要因となったことが指摘されている。⁹¹なおそうした人的要因に加え、24年中に実施された視学官等による地方学事の視察も現実主義的方向づけに少なからぬ影響を与えたのではないかと推察される。視察によって把握された地方の実状たるや実に劣悪なものであり、理想と現実の大きなギャップは、少なからず理想を現実の方に引き下げる方向に作用していったと思われるのである。

そうした現状妥協的な改正に対しては批判もみられた。「小学校の設備につきて」と題する『教育時論』の記事は、4月の「小学校設備準則」は不完全な校舎を改良すべく制定されたもので、中には実行し難きところもあるとの非難も生じたが「文部省は此等の非難を聞きて、忽ち怖気の付きたるにや、或は別に感ずる所あるにや、近來頻に小学校の設備は民度に相応ならざるべからずと吹聴するものゝ如く、仮令は校舎の不潔醜穢云ふに忍びざる体裁なるも此等の学校に通学する生徒の家屋は、尚之より醜穢なることを知らば、文部省の設備準則に背かざる様整置せよと強迫するに及はずなど云へることは、文部省の方針として新聞雑誌が屢々記述する所なり。」⁹²と報じ、「吾等も村落の小学校をして華族学校の如く美麗ならんことを望まず、去れど其土地の民屋が如何に不潔なるも、小学校は群童集合の場所なれば、充分に清潔にせざるべからず、⁹³と学校衛生の基準を児童の家屋との対比において引き下げる如き姿勢を批判している。

さらに明治26年（1893）1月下旬にも、校舎建築は努めて市町村経済の状況をはかって計画すべきこと、そしてなるべく校舎の新築、増築を見合わせ、在来の校舎にて間に合わせるべき旨の内務、文部両大臣命での「文部省通牒」が各府県宛に出されたが、⁹⁴それに対しても「一方に於ては、就学の督責、学級の編制、及学区の異同に依り、現に校舎の建築、若くは増築を要

する事情あるを知らながら、内務省の権力を畏れて、不本意ながら、曲けて同意を表したる卑屈の所為なりと謂はざるを得ず」⁹⁵と批判されている。

(4) 教員住宅の付設

4月制定の「小学校設備準則」には「校舎ニ傍フテ成ルヘク学校長若クハ首席教員ノ住宅及菜園ヲ設クルヲ要ス」⁹⁶と規定されていたが、岩手県巡回中の中川の『日記』に教員住宅についての記録が2つ見られる。ひとつは6月5日、気仙郡盛町から日頃を経由し世田米に向かう途中「田代簡易小学校ニ立寄ル 教員ノ住居アリ」であり、もうひとつは翌6日、世田米を発ち再び内陸山間部の江刺郡に向かう「路上大股簡易小学校舎ヲ見ル 教員ノ住居アリ」である。いずれも内陸山間部の簡易学校である。当然極めて小規模で交通も不便な学校であったと思われる。教員住宅の付設はもとも通勤不便といった地理的条件への対応策であったと思われるが、次第に教員が学校敷地内に居住することの教育（訓育）上・管理上の意義が付与され強調されていくことになる。

明治24年4月の『教育時論』「時事寓感」欄に「学校教師の住宅」と題して「凡て教師は、教場にありて生徒を教授するのみを以て、職任を尽したりと為さず、常に己の言行を以て、生徒の模範たらんこと、最太切なるは、今云ふに及ばざる事なるべし。去れば此点より考ふれば、教師は必ず学校の近傍に住居して、朝夕に生徒と親密の交際を有つこと、第一の必要にして…」⁹⁷とあり、西欧諸国の例をあげ、わが国でも師範学校、中学校はじめ生徒の寄宿舎のある高等小学校にも設けるべきことが述べられている。さらに同誌次号には「学校教師の住宅」との同題の「社説」で詳しく論じられている。それによると、教育住宅の付設は森文政期以来の主張とされる。すなわち学校は単に知識技能を授けるだけでなく徳性を涵養し気質を鍛練する場でもある。そのためには「尚授業時間の外に於て、教師は生徒の風儀を視察し、生徒は教師の言行を学ぶの餘裕無かるべからず」⁹⁸と教師の授業時間外の日常的感化が重要であるという。そのような主張は、修身教授における教師の口授法の採用⁹⁹、および教師の日常的感化をこそ重視することから帰結される修身科廃止論など¹⁰⁰、森文相の教育方法観とも相応じていると言えよう。また「若し吾等の希望するが如く、諸学校に教師の住宅を設けて、教師と生徒と常に同一の場所に起臥するとせんか、互に情実を知り尽して、其間に益々恩愛の空気を充溢せしめ、敢て力を用ひずして生徒の気質を鍛練するを得べく、従て授業上の便利も亦鮮か

らざるべし。」⁹³、「教師が常に学校内に住居するものとせば、生徒は授業時間の外にも、折々学校に來りて遊戲の場所と為り、教師も亦喜んで之を待遇するときは、遂に學校を以て、宛も親戚の家に於るが如き感情を生ずるに至るべし。」⁹⁴と師弟關係や學校管理、家庭と學校の一体化などの利もあげている。

「小学校教員ノ居宅ヲ學校構内ニ設クルノ可否」問題は、大日本教育会における懸賞問題にもなっていたが、その回答として三刀谷扶綱は「設クルヲ可トス但シ便宜ニヨルベシ」⁹⁴と述べ、その理由として「教員ノ一處ニ停住シテ職ニアルノ長キハ生徒ノ教養上ニ効力アルモノニシテ彼ノ茲ニ一年彼處ニ二年ト云フガ如キ転々移動スルガ如キハ最も生徒ノ訓練上ニ害アルモノナリ」⁹⁴と教員定住策として、また教育・訓練上の意義を指摘している。中川の『日記』中にも「不完全ト云フベシ併シ校長ノ交迭等基因タルベシ」(6月4日 氣仙郡高田町尋常小学校)とあるように、教員の頻繁な移動による教育上の弊害も認識されていた。⁹⁵したがって教員住宅の設置により教員も學校への愛着心を生じ定着をはかれること、また時間外においても校務を執れるなどの利点をあげている。ただし「動モスレバ自家ノ器具ト校具トヲ混用スルノ弊」⁹⁴はあると言う。なお「裁縫科ハ其教員ノ宅ニテ学フト云フ」(6月2日 東磐井高等小学校)といったことも教員住宅付設による便宜と言えよう。

「學校教師住宅の必要」と題する『教育時論』の論説は、教員の經濟生活に関わる醜聞途絶の方法として、すなわち「貪惡恥なきの教員は、啻に富豪の児童に篤くして、父兄の歡心を買ひ、以て些細の収入を期し、富豪の家に寄寓して、其子弟を教ふるが如き、至る處其例少なからず、」⁹⁶といった状況の解決策として教員住宅を提案している。すなわち「教員は何處に寓するも之を問はず、學校を退けば、其居所に責任なきは目下の状況なり、只夫れ居所に責任なく、何處に至るも勝手なり、何處に住するも氣儘なり、醜聞の起る大に此に基いせざるを得ず。若し學校の住宅ありて、学務委員の近くに住するとか、父兄、少しくは細心する所あるべく、又其住宅を貸与せられたるに免じて、謹しむ所あるべきなり。吾等は醜聞途絶の一方便としても、亦教師に住宅を与ふるの急務なるを知る。」⁹⁶と述べている。

先述したように明治24年11月に「小学校設備準則」は改正され校舎施設・設備に関し土地の民度、學校經濟の観点から質的基準の後退がみられたが、教員住宅に関しては全文4カ条中の第2条に「土地ノ情况ニ依り便宜學校長若クハ教員ノ住宅ヲ設クヘシ」⁹⁷と、むしろ

その設置が奨励されていることも注目される。その根拠は、「説明書」に「學校ノ設備ハ地方ノ情况ト民力ノ進否トヲ考ヘテ其度ヲ超エシメス十分ニ節約ヲ加フヘキハ勿論ナリト雖モ學校長若クハ教員ノ住宅ヲ設クルハ教育上最モ必要ノ事トス此事タルヤ教員ヲシテ學校ヲ愛スルノ念ヲ深クシ懇篤ニ教育ヲナシ訓練ヲ施シシムルノ便宜アルモノナレハ漸次治ク行ハル、ニ至ランコトヲ務ムヘキナリ」⁹⁸とあるように、その教育・訓練上の意義の認識であった。

明治20年代の後半は單級學校の比率が最大になり、その教育方法についての研究が盛んにおこなわれるが、特に一教員で管理する單級學校の場合、教員住宅を學校敷地内に設けることの利害についての研究がなされた。次はその得失論(要旨)の一例であるが⁹⁹特にその利点が強く認識されていくことになったと思われる。

*利とするところ

- ①児童が教員の家族の親密な姿に接することにより、おのずと家族に接する訓練となり、感情の教育上の利がある。
- ②學校の校舎、校具類を、教員の校舎と心得、つとめて大切に清潔に扱うようになり、進んで清掃などの労をとるようになる。
- ③教室においてよりも教員の住宅で訓誨をおこなう方が効果がある。
- ④男女生徒とも教師宅の掃除、割烹炊事、洗濯、衣服の補綴などの手伝いを通して実地の訓練になる。
- ⑤校舎、校具を教師が保管することにより、破損が少なくなる。
- ⑥放課後の來訪者や送状への対応が可能。
- ⑦學校書類が教師住宅にあるので、随時事務がとれる。
- ⑧始業時間に遅刻することが少なくなる。
- ⑨教師が模範となり、相互に家族間の關係を学ばしめる利益がある。
- ⑩教師が病気で欠勤してもなお病褥にあって予習、復習を指示することができる。
- ⑪住宅の周囲に菜園などを設け、教師が栽培する姿を通して労働の習慣、自然愛、公共心などを養成することができる。

*害とするところ

- ①住宅の掃除、家具の整頓に注意しない場合は不潔不整頓の習慣を生徒に与える。
- ②学務委員や參觀人の不時の來訪があり、窮屈の思いがする。
- ③私用による來訪者があり授業などが妨げられる。

- ④教師が病気になっても無理に出勤する傾向から病気を悪化させることがある。
- ⑤教師は、生徒の生活よりも幾分上位を要する故に障子や襖の修理などおろそかにできない。

要するに利は生徒と校舎にとってのものであり、害は教師にとってのものと言える。したがって教師が「教育ノ為ニ身ヲ犠牲ニ供スルノ覚悟」^⑧によって解消されると結論している。

このように教員住宅の付設については、その教育・訓練・管理上の利が強調されていくのであるが、現実には教員住宅の付設はあまりはかどらなかったようである。「…小学校令の実施せらるゝと共に、同設備準則中両陛下の御影 勅語謄本奉置の如きは、着々実行せらるゝにも関せず、又此準則に従ひて、頻々として学校の新築せらるゝものあるにも関せず。教師住宅の事の如き、強行法にあらざるが故に、農業練習場等と一般、各府県に於ては、毫も之を設くるものあらざるが如し。」^⑨とある。

2. 学校・学級編成の実態

(1) 単級学校と複式授業の実態——「学級編制等ニ関スル規則」との関連——

明治23年(1890)の「小学校令」において「小学校ノ単級多級ノ制男女ヲ区別シ教授スヘキ場合多級ノ学校ニ学校長ヲ置クヘキ場合一教員ノ教授シ得ヘキ児童ノ数ニ関シテハ文部大臣之ヲ規定ス」(第13条)^⑩と単級学校と多級学校が法制化されたが、それら学校の学級編成と教育方法については翌24年(1891)11月17日に制定される「学級編制等ニ関スル規則」(文部省令第12号)によって詳細に規定される。したがって中川の巡視は、その「規則」が制定される以前であったが、

特に岩手県の山間僻地において単級学校や複式編成の実態が目撃記録されている。例えば6月13日、東閉伊郡の中心地宮古に向かう途中に視察した曇日尋常小学校について『日記』に次のように記されている。

単級	第一年	書方	教員ハ尋常師
assez bien	第二年	修身	範学校卒業生
bien anime	第三年	讀方	板垣政——氏
	第四年	画	

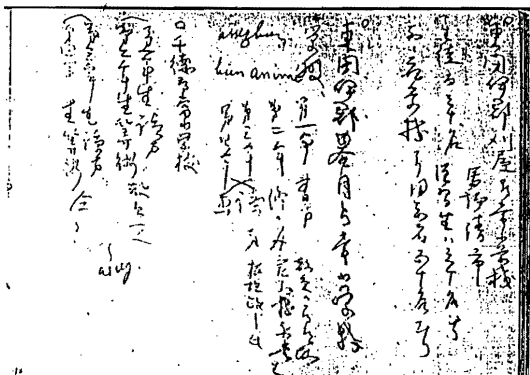
これは「単級」と記されていることから明らかに単級学校であった。一教員で全学年生徒を教育する単級学校は、その教授上の条件は極めて不利なものであったが、師範学校卒の有能な教員であったせいか assez bien (大変良い)、bien anime (極めて活発) と好評されている。

単級学校と思われる学校は他にもみられる。6月16日に視察した東閉伊郡田老尋常小学校においては4年の算術、3年の読方、温習生の算術と習字の授業が実施されていたが、「右四組ヲ教員一人ニテ受持チ居ル惣人員八十名斗リ」と記されている。また同日視察の北閉伊郡小本村尋常小学校についても「第一年 書方 第二年 作文 鮪ヲ贈る文 第三年 算術 乗 第四年生 算術 温習生 三名」と列記のあと「右一教場アリ屯名ノ教員ニテ教授ス」と記されている。

また複式授業も少なくない。6月13日視察の東閉伊郡千徳尋常小学校については『日記』に次のように記されており、二学年ずつ合併の複式授業であったと思われる。

第一年生	讀方	教員一人 assez 全
第二年生	算術	
第三年生	讀方	
第四年生	算術	

資料 中川の『巡視日記』の一部



明治24年11月17日に制定された「学級編制等ニ関スル規則」には、学級編成法についての「説明」文中「修業年限四箇年ノ多級学校ニ於ケル編制法ノ一例ヲ述ヘテ地方当局者ノ参考ニ資ス」^⑪として例示されたその「一」に「本科正教員二人ヲ置クノ学校ニ於テハ第一学年第二学年ノ児童ヲ合セテ一学級トシ第三学年第四学年ノ児童ヲ合セテ他ノ一学級トスヘシ」^⑫と述べられているが、千徳尋常小学校はまさにその実例であった。

また「規則」の第8条に「多級ノ学校ニ於テハ教科目ノ種類ニ依リ一人ノ本科正教員数学級又ハ其一部ノ

児童ヲ合シテ同時ニ教授スルコトヲ得⁽⁴²⁾とあるが、これについても「説明」文中に「其一例ヲ挙クレハ修身唱歌の一部分ノ如キハ甲乙若クハ乙丙ノ二部又ハ全級ノ児童ニ同一ノ教授ヲ施スコトヲ得ヘク…」⁽⁴³⁾とあり、特に修身と唱歌は全学年合同ないし複式授業が可能ないし有効な教科とみられた。これも中川の『日記』をみると、6月17日視察の北閉伊郡岩泉尋常小学校については次のように記されており、修身は明らかに1・2年合同の授業であったと思われる。また「板敷ノ上ニ坐シ居ル」とあり施設設備も不備であったと思われる。

第三年生 算術 珠、乗 不充分
温習生温習讀本上、a
第一年生 } 修身 板敷ノ上ニ坐シ居ル
第二年生 }
鼠船中、親ヲ負テ逃ケタル鼠助ケサル云々

さて「説明」文に戻ると「之ニ反シテ読書算術ノ如キハ第三学年及第四学年ノ児童ヲ合セテ一部トシタル場合ニ在リテハ教授ノ都合ニ依リ其児童ヲ二分シテ教授スルノ必要ヲ生スルコトアルヘシ」⁽⁴⁴⁾と、学力差が著るしい読書と算術は教授の都合により適宜生徒を区分すべきとされているが、これも中川の『日記』中、6月18日視察した南九戸郡野田尋常小学校について「二年生 讀方 総テ力アリ（聲ニ）」「第三年生讀方 声ニ力アリ」と授業において生徒の声の大きいことが好評されたあと「此校ハ一体ニ宜シ讀方ハ教師好ク讀ミ聞セ至極妙ナリ後ニ生徒一人前ニ讀ミ衆生徒之ヲ同唱ス之レ宜シト雖モ多人数ノ所ニテハ生徒ヲ区分スルヲ要ス」と生徒区分の必要が提言されている。

以上要するに「学級編制等ニ関スル規則」において詳細に規定（条文化）される事柄がすでに実態として、あるいは中川の意見として存在していたのである。換言すれば「学級編制ニ関スル規則」は、ある程度そうした実態の裏づけを背景として条文化されたものと推察される。⁽⁴⁵⁾

(2) 簡易学校の存在

今回の岩手県巡視において中川は、簡易学校7校を視察している。田代簡易小学校（6月5日）、大股簡易小学校（6月6日）、摂待簡易学校（6月16日）、乙茂簡易学校（6月16日）の4校は外観を一寸見ただけであった。あとの3校は中川が6月11日に盛岡を出発し宮古に向かう途中、中閉伊郡川井村でみた3校（川井、箱石、古田）で『日記』に詳しく記録されている。日

付は書かれていないが、『日記』の末尾メモから11日の宿泊地が川井村より手前の門馬村であり12日の宿泊地が川井村であることから、それら簡易学校を視察した日は恐らく12日であったと推察される。『日記』の記述は以下の如くである。

中閉伊郡川井村 佐々木某氏
川井簡易学校 在籍六十名 温習十二名
箱石 全 全 五十五名
古田 全 全 八名
温習生ヨリ卒業後三ケ年位ハ来ル
用書最□ハ尋常讀本第四
二年目ヨリハ高等科讀本第一第二位
算術ハ原比例ヲ知ル
是等ノ生徒ハ北海道并ニ越前ノ漆商人ニ簡單ナル手紙ヲ送り用ヲ弁スト云フ
温習生ニ進ミタル者即チ第三年目位ノモノハ旧ノ五節句等休日ノ日又ハ冬間ハ夜学ニ来ル

○簡易三ケ年ヲ終ヘタル者モ已ニ手紙ヲ書スルヲ得ト云フ併シ就学セシキハ年齢已ニ十四五歳ナリト云フ

「知ルヘシ簡易科ノ本体ヲ」

○生徒通学ノ一區域ニ就キ區長副區長ヲ生徒中ニ設ケ生徒ヲ誘導シ且取締ヲセシムト云フ好結果モアリト云フ⁽⁴⁶⁾

○温習生ノ為メ教員ハ別ニ報酬ヲ取ナシ是一ニ教育ヲ重ンスルモノナリ

このように温習科生徒の在籍者数、修学期間、教育内容、生徒の学力、通学方法などが記されている。特に生徒の学力状態について詳しいが、他にも例えば江刺郡巡視中の6月7日の『日記』に次の記述があり、中川は教育の効果としての生徒の学力の状況について少なからぬ関心をもっていたことが窺える。

○尋常三年位ノ教育ヲ受ケタル者此度徴兵検査官ノ問ニ答フルニ應對ノ工合ハ明治之初年頃ノ者ト優ルモ自分ノ姓名ヲ書シ得ル者ハ漸クニ之ヲナスニ過ギス手紙ハ迎モ書ス出来スト云フ又以テ三年位ニテハ足ラサルヲ徴スルニ足ル以上下田郡長ノ話シナリ因テ何トカ勸考ヲ要スルナリ

なお明治期の生徒の学力に関する資料は少なくない。次表は陸前国登米郡における明治29年の調査で⁽⁴⁷⁾生徒の出生年別による学力程度が示されているが、明治10

年代後半に生まれ小学校教育を受けた者でも自分の姓名を書きうる者は半数にも満たず、日用文通以上のできる者は1割程度という有様であり、その状況は中川

が『日記』で指摘していることともだいたい一致していると言えよう。

表3. 陸前国登米郡川村内狼川原駅有学無学調査表（明治29年12月調）

出生年次		安政4年以前	明治1～5年	明治11～15年
自分の氏名も書けない無学者	男	149 (38.89%)	24 (26.97%)	25 (17.73%)
	女	373 (95.94%)	67 (77.01%)	76 (72.38%)
	計	522 (63.89%)	91 (51.70%)	101 (41.06%)
自分の氏名を書ける有学者	男	204 (47.78%)	46 (51.69%)	92 (65.25%)
	女	15 (3.85%)	19 (21.84%)	24 (22.86%)
	計	219 (26.81%)	65 (36.93%)	116 (47.15%)
日用文通以上のできる有学者	男	74 (17.33%)	19 (21.35%)	24 (17.02%)
	女	2 (0.51%)	1 (1.15%)	5 (4.76%)
	計	76 (9.30%)	20 (11.37%)	29 (11.79%)

ところで簡易科（簡易学校）は、森文政期の明治19年5月25日、「文部省訓令第1号」（「小学校簡易科要領」）において制度化されたものであり、修業年限3年以内、学科は読書・作文・習字・算術の4科目、授業時間は毎日2時間以上3時間以内、学級生徒数60人以下の場合は学級を分けず、その他の点は尋常小学校に準ずるという、要するに極めて「簡易」な学校であった。⁽⁴⁷⁾ 地方の経済力などの事情に応じて初等教育の普及を意図して設けられた学校であったが「只々地方によりては、簡易学校を目して貧民学校の如くに言い嘲し、為に其設置を厭ふ如きの情態」⁽⁴⁸⁾などもあって、予期に反して振わなかった学校である。しかし僻地的様相の濃い岩手県においては極めて多く、中川の視察においてもいくつかみられたが、明治22～24年頃は県下の小学校数の半数を占めていた。⁽⁴⁹⁾

表4. 岩手県下の小学校内訳

年次	公立	私立	尋常小学	簡易小学	高等小学
明21	541	2			
22	550	3	270	266	17
23	546	3	269	265	17
24	548	2	268	265	17

3. 温習生、専修生の実態

(1) 温習生の実態——蘆東山の遺風（東磐井郡）——
岩手県巡回中の中川の『日記』には温習生について

の記述が多い。6月1日に視察した東磐井郡薄衣村好善尋常小学校について「一尋常第四年 讀方 旧温習生九名一同ニアリ（別課ト）書シアリ」、また同日視察の薄衣尋常小学校についても「温習生 習字 本年老年分」と記されている。その他「温習生 珠算」（6月4日 気仙郡高田町尋常小学校）、「温習生六名」（6月7日 江刺郡伊手尋常小学校）、「温習生ハ三名ナリ別ニ夜学校アリ同志者五十名斗リ」（6月13日 東閉伊郡刈屋尋常小学校）、「温習生三十名 算術 習字」（6月16日 北閉伊郡田老尋常小学校）、「温習生 三名 算術 四名 作文 柁注文之文a」（6月18日 南九戸郡野田尋常小学校）、「温習生作文九名 田植ニ人ヲ頼む文」（6月19日 南九戸郡宇部尋常小学校）、「温習生十二名」（6月19日 南九戸郡大野尋常小学校）という具合である。

ところで温習生制度は明治19年の「小学校令」第12条に基づき、同年5月25日公布の「小学校ノ学科及其程度」（文部省令第8号）の第4条に「土地ノ情况ニ因テハ小学校ニ温習科ヲ設ケ六箇月以上十二箇月以内児童ヲシテ既修ノ学科ヲ温習シ且之ヲ補修セシムルコトヲ得 但尋常小学校ニ於テハ修業年限ノ外高等小学校ニ於テハ修業年限ノ内ニテ之ヲ設クヘシ」⁽⁵⁰⁾との規定により成立したものであった。以後「尋常小学ニ温習科ノ有無ヲ可否スルノ説ハ、各地方ノ民情ニヨリ一様ナルベカラザレドモ」⁽⁵¹⁾、一般には高等小学校を設置して温習科を廃止する傾向にあった。岩手県においても、盛岡市では明治24年2月に温習生は廃止されたが、⁽⁵²⁾ 中川の『日記』にみたように県下僻村には温習生が極

めて多かった。

なお上述のように東磐井郡薄衣村の好善尋常小学校と薄衣尋常小学校の温習生を視察した中川は、「以上二校ハ温習生ノアルニ驚ケリ之レ学ヲ好ムノ風アルヲ以テナリ彼蘆東山ノ遺風アルカ如シ」とも『日記』に記していたが、その「蘆東山」とは一体いかなる人物であろうか。『教育時論』に掲載の「岩手県東磐井郡に於ける舊時の学校」によると東磐井郡は芦東山の生地でも「東山」と称し一郷皆東山の薫陶のもと学校が組織されていたという。そして「今年文部省視学官中川元氏同地に巡視して、其舊記を得たり」⁵³として彼の履歴と旧藩制時代の学校の様子が紹介されている。その大要は以下の如くである。

＊芦東山履歴 元禄9年（1696）磐井郡東山渋谷村に生まれる。幼にして穎悟、読書を好む。15歳で仙台に出て田辺整斎に学ぶ。その後、京師の浅井義斎、三宅尚斎等に学ぶ。一旦仙台、そして郷里に帰るが、父の死没後江戸に出て儒員となり室鳩巢に師事する。享保20年以来藩立学校創設の要を度々進言、元文元年学問所の創立をみるに至る。『無刑録』18巻を著す。安永5年（1776）6月没 享年81歳。

東磐井郡は古来「東山」と称し、村数38、戸数9766、人口56670余人。「学制」頒布前の村校教授の方法は、芦野孝七郎の考定により専ら実学を重視、村民も実学を勉むる風が強く、以来山谷をも開拓し田圃を拡大し、殊に養蚕が盛んで名産の生糸「奥仙」はこの地方の産物である。また民俗僕忠にして報国の志厚きも皆学風の然らしむる所という。学校はおおむね教師の自宅を充て、教員は村内居住の士族、祠官僧侶が主で大村には3～4ヶ所、小村には1～2ヶ所設けられた。毎朝句読を授け午後は温習という日課。就学状況は「本郡学生ハ八歳ノ正月入校、十五歳迄就学スルヲ常トス、而レトモ貧家ノ子弟ハ、十三歳ニテ退校、家営ヲ助クル故、別ニ寒習ニテ其不足ヲ補ヘリ、寒習ト称スルハ十一月ヨリ歳末ニ至ル、此時ヤ農家稼業了ヘ、全ク閑ナル故、十三歳ニテ退校シタル貧生中ニ高等恰好シ、此時日ヲ期シ入校スルナリ、寒習中ノ授業法ハ頗ル厳ニシテ、其效驗半歳以上ノ修学ニ匹敵スト云フ」⁵⁴とあり、温習生や夜学など当地方の好学の風土に根差すものであったと言える。

中川の『日記』には「此薄衣村ヨリ学生多ク東京ヘ出ツ現ニ本郡長田辺氏ハ本村ノ生れナリ学生ニシテ已ニ立身セシ者多シト云フ軍人代言人教員等ナリ」と村の出身者で立身出世した者が記されているが、向学

の士も多かったものと思われる。

(2) 裁縫科専修生と松操学校卒業教員——女子就学率向上策——

6月4日視察の気仙郡高田町尋常小学校について、中川の『日記』に「裁縫専修科生アリ教員ハ松操学校ノ卒業人ナリ」とある。高田小学校は県下でも裁縫が最も盛んな学校であったようで『岩手学事彙報』にも「同校裁縫科の盛なる由は予て聞き及ひしか今回の定期試業にて高等科を終へたる専修科生徒三十餘名あり郡内にてハ最も盛なるものなりと云ふ」⁵⁵と報じられていた。『日記』には次に視察した気仙高等小学校についても「同（二年…注）女 裁縫 松操学校卒業生ナリ」と、また6月14日視察の東閉伊郡高等小学校についても「裁縫科専修生アリ教員ハ仙台松操学校ノ卒業生ナリ」とある。このように特に高等小学校に裁縫専修科が多く置かれ、その担当教員はたいてい仙台の松操学校の卒業生であった。ところでその松操学校とは一体どのような学校だったのであろうか。次は『東京茗溪会雑誌』掲載の「宮城県学事概況」の一節である。

…裁縫専門学校の盛なる市内各所に之あり其重なるもの七校之あり其尤も盛なるを松操学校と称へて裁縫教員を養生するの目的にて明治八年の創立より本年に至るまで九百八十四人本年末に至らば千餘人の卒業生を出し候半其内現在職を奉ずるもの三百餘人皆東北諸県の裁縫教師に充られ候よし故に市内各小学校裁縫教師ハ勿論裁縫専門学校教員其他裁縫を以て業を営む者ハ皆松操学校より出でざるものハ稀に御座候一時東北諸県中ニ裁縫教員ハ松操学校の卒業生に非されは採用ならざる位に候ひし其盛なる事推し計られ候…（傍点引用者）⁵⁶

すなわち松操学校は東北各県に多くの裁縫教員を輩出していることで有名な学校であった。岩手県においても裁縫教員に同校卒業生がいかに多かったかは中川の『日記』をよっても看取されたところである。

ところで女子の裁縫科は、明治12年の「教育令」において登場、以後23年の「小学校令」においても、尋常、高等いずれも「女児ノ為ニハ裁縫ヲ加フルコトヲ得」（第三条）⁵⁷と規定される。また同令第七条に「尋常小学校又ハ高等小学校ニ補修科ヲ置クコトヲ得」、⁵⁸また第六条に「高等小学校ニ於テハ土地ノ情況ニ依リ農科商科工科ノ一科若クハ数科ノ専修科ヲ置クコトヲ得其専修科ヲ置クコトヲ得其専修科ハ正教科ニ併セ置キ又ハ之ニ代フルモノトス」⁵⁹と補修科と専修科につい

ての規定も登場する。「補修科」は明治19年「小学校令」における「温習科」が改められたものであり、「専修科」は明治23年の「小学校令」で新設されたもので、実業的教育振興を意図して特に高等小学校に設けられたものであった。中川の『日記』にみたように岩手県においては女子の裁縫科専修生が多かったが、養蚕が盛んな当地方の産業に根差し、かつ女子の教育要求に応じるものであったと考えられる。「教育令」における裁縫科の復活は、「学制期」の西欧移植的カリキュラムに対する批判と近世来の女子教育の伝統、女性のあり方をめぐる人々の生活感情や生活実態に根差したものであり、女子就学率の向上を意図したものであったが、⁶⁷⁾封建的遺風の濃厚な東北地方の女子の就学率は極めて低く、次表に示したように岩手県の明治20年代前半期における就学率は男子が60～70%であるのに対し女子はわずか20%前後であった。⁶⁸⁾そうした就学状況のなかで、裁縫教育は同県における女子の就学率向上策としても重視されたものと推察される。

表5. 明治20年代前半期の岩手県の就学率

年 次	学齢児童数	就学児童数 (率)
明治21年	男 59847	男 39298 (66%)
	女 50920	女 10165 (20%)
22年	男 62625	男 39096 (62%)
	女 51358	女 8936 (17%)
23年	男 61573	男 40766 (66%)
	女 49765	女 9656 (19%)
24年	男 63276	男 42553 (67%)
	女 52385	女 10330 (20%)
25年	男 66895	男 49832 (74%)
	女 52954	女 13600 (26%)

Ⅲ. 盛岡市内の学校視察と岩手教育協会総集會に於ける演説 (6月10日)

1. 盛岡市内の学校視察

一ノ関から始まった中川の岩手県巡視は、東磐井郡、気仙郡、江刺郡と県南地方を終え、水沢から鉄道利用で盛岡に赴く。⁶⁹⁾6月8日に盛岡到着した中川は翌9、10の両日盛岡市内の学校を視察し、岩手教育協会で演説をおこなっている。巡視の模様について『岩手学事彙報』には「中川視学官」との見出しで「去九日十日の両日を以て市内各学校を巡視せらる、九日は、岩手県尋常師範学校、盛岡高等小学校、十日は岩手県尋常

中学校、盛岡第一尋常小学校、盛岡第二尋常小学校、盛岡第三尋常小学校等を親しく視察せられ、管理上教授上に付き諄々注意を促され又希望せられたる處ありしといふ」⁷⁰⁾と報道されているが、中川の『日記』にも、それら学校の視察記録がある。先ず岩手縣師範学校について、視察した授業科目、学年、授業内容が記されているが、3年の倫理は「賞罰」「報酬」、2年の漢文は「外史 織田豊臣」、1年の数学は「十進法等」、4年の物理は「音響学」などと授業内容が記されている。付属小学校においては高等4年の図画、高等2年の作文、尋常1年の数方、2年の読方と4年の珠算、その他裁縫、「師範生徒惣員体操」などを視察している。

次に盛岡高等小学校において、1年の読書は「句讀長シ」と注記されている。3年の地理は「亜細亜山脈」、bien と評を付している。1年の作文は「桜山神社参詣ニ友ヲ誘ふ文」、4年の理科は「引力 重力」、1年女子の裁縫は「花雑巾刺方」、2年の英語については pas assez、3年女子の唱歌については bien などの評を付している。また4年生の「操銃体操」も視察、「各教場生徒別名札アリ」とも書かれている。

翌10日は岩手尋常中学校、盛岡第一尋常小学校、第三尋常小学校、第二尋常小学校、獣医学校の5校を視察しており、かなりハードな視察行程であった。獣医学校は「一覽セリ」という程度であったが、それ以外の特に尋常小学校3校については丹念に視察している。同日には岩手教育協会総集會が盛岡中学校を会場に開催され、その席で中川は特に授業法を中心に演説しているが、それは主に盛岡市内の小学校の視察にもとづく批評であった。したがって盛岡の小学校の視察については、次に演説との関連において考察することにする。

2. 岩手教育協会に於ける中川の演説

『日記』には記されていないが10日に岩手教育協会総集會が開催された。『岩手学事彙報』に「延期しきたりし総集會ハ、名誉會員中川視学官の来盛を好機とし、去る十日を以て中学校内に開會せらる」⁷¹⁾とあるように中川の来盛に合わせての開催であり、「来会者殆んど百名計」⁷²⁾という盛況ぶりであった。清川副会長の開會挨拶、会計報告、討議のあと中川の演説がおこなわれたが、その時の演説全文が『岩手学事彙報』に掲載されている。それと『日記』をもとに中川の演説内容について考察することにしよう。

中川は、演説の冒頭で、第1に中学校生徒のこと、第2に盛岡の尋常小学校についての批評、第3に教育

会について述べると前置きしている。⁶⁰中川の『日記』の末尾の方に次のようなメモがあるが、内容がぴったり符合することから、それはこの岩手教育協会における演説の控えであることが判明した。

- 一 中学校生徒ノヲ
 - 一 小学校授業批評之ヲ
 - 一 教育會隆興之事
- 天ノ時ハ地ノ理ニ如カス地ノ理ハ人ノ和ニ如カス

(1) 中学生徒の東京遊学の風潮への戒め

さて中川の演説内容であるが、まず中学校生徒に関して「只此地ノミナラス、他ノ中学校も同感テゴザイマセウ、随分入学シテ来ル者ハ沢山アリマスルガ多クハ半途ニシテ、退学シテ仕舞ト云フヤウナ有様デアリマス、」⁶¹と中途退学者が多いことを指摘する。彼ら中途退学者は学問への志を欠く者、資力を欠く者、資力はあるが志を転じて上京する者など様々なタイプがあるという。進学のため上京する者は少なくないが、彼らの多くは都会の悪習に染まり遊蕩に陥る場合が多いことを指摘し、「惟フニ幼稚ノ時ノ教育ト云フモノハ、成ルヘク清閑ノ地ニテ為スノカ良キコトデアリマス」⁶²と、清閑な地方の環境を推奨している。そして当地はさいわい最寄りの仙台に高等中学校があることから「先ツ仙台位デアリマスレハ、余リ遠クモナシ風俗人情モ余リ異ツテモ居ラナイカラ、成ル可ク東京ニ出サズ仙台ノ高等中学ニ入レタラ宜シカラウ」⁶³と述べている。周知のように明治初期は立身出世が時代のブームで、志を高くもつ青年はみんな中央（東京）を志向した。薄衣村もそうであったように、中央に出て立身出世した者は中川も注目するところであった。青年のそうした高い志を尊重する一方で中川はまた、地方の青年がただやみくもに上京する風潮を戒めているのである。そのためには地方における教育機関の充実も必要なわけで、その点例えば宮城県佐沼高等尋常小学校の「別科」が、中等教育に対する地元の要望に対応するものであったことを高く評価していたことと相応じていると言えよう。

(2) 授業批評に関する視察と演説

① 読方授業法

次に中川は盛岡市内の尋常小学校の視察の批評として、各学科の授業法について詳しく述べている。先ず「読方」の授業法について、読方を一々黒板に書いて生徒に覚えさせ、次に書冊を開いて教えるという大方のやり方について「至極良ヒ方法ト思ヒマシタ然シ悉

ク皆生徒ニ覚エサセテカラト云フニハ時間ハ費エル」⁶⁴と案じていたところ「計ラスモ第一尋常小学校ノ読方ノ教授方ヲ見マシタ所ガ、ソレハ教師ハ生徒ニ読ミ聞カセテ夫レカラ或生徒ニ読マシメ、而シテ生徒一声ニ読マセテ行クヤウナ趣向テ教師ハ生徒ガ本ヲ能ク見テ居ルヤ否ヤニ注意シテ居テ行届キ、其様甚ダ簡便ニシテ時間モ取ラス大ニ進ミ行クヲト思イマシタ」⁶⁵と述べている。『日記』によると中川は盛岡第一尋常小学校において3年の算術（「減乗加乗」）、4年の算術と読方、1年の数方、2年の遊戯、2年男子の唱歌などを視察しているが、4年の読方について「讀方一齊ニ讀ム」と記しており、最後に「○讀書之事 ○唱歌之事」と記していることから、読書と唱歌について感ずるところがあったのであろう。また「○女教員女生徒ヲ取扱フ」⁶⁶とも記しているが、女教師についても演説している。『日記』の記述中、冒頭に○印をつけている事柄は演説のための覚え書きでもあった。

以後の中川の『日記』においても「第一年生読書 句讀長シ」（6月8日 盛岡高等小学校）、「第一年生讀方カキケコ」（6月20日 軽米尋常小学校）、「高等第二年生讀書a 全課ヲ一生皆讀ム」（7月17日 秋田県旭尋常高等小学校）、「高等第一年生讀書 溺○ 生徒交々讀ム a」（7月2日 北海道量徳尋常高等小学校）などの記述があり、読方については特に授業方法に注意が向けられている。

② 唱歌

次に唱歌について「私ノ聞ク所ニテハ音カこなレテ居ランヤウニ思ヒマシタ、声ヲ上ケテ行ク高イ方ノ声ニ於テハ耳ヲ裂ク様ニ感ジマシタカ、一体斯云フ様ナ特殊ノ技能ハ余程質ノ善イ教師ニ就カストイケマセヌ」⁶⁷と、唱歌においては特に優れた指導者の必要を強調している。唱歌も、盛岡高等小学校、盛岡第一、盛岡第三小学校で視察しており、盛岡高等小学校2年女子の唱歌については bien と評しているが、6月8日に視察した江刺高等小学校のことが余程印象に残っていたと思われる。24年4月刊の『岩手学事彙報』に「江刺高等小学校にては、去月中百二十圓の独逸製風琴を購求せりと云ふ、小学校にして此過大なるお金を投して楽器までも購求せし上は、其他の必要品は定めて欠くる処なからん」⁶⁸との記事からも、同校は唱歌教育にはかなり力を入れていた。中川は6月8日に同校3、4年の唱歌を視察している。恐らくすでに購入されていたドイツ製のオルガンも披露されたであろう。授業視察の評については『日記』には何も記されていないが、『岩手学事彙報』に「（中川視学官は…引用者注）

江刺高等小学校に臨まれ一時半ばかり各教場を巡視せられしに何等の批評もなかりし由なるか只唱歌は声音の練習未熟にして無闇に発声するを以て発声器を害ふの恐れあり且調節早きに失するかため感動を与ふること薄ければ此辺に注意すべき旨を談せられしと云ふ」⁶⁰と報じられているように唱歌について注意をしたのであった。24年11月制定の「小学校教則大綱」には「唱歌ハ耳及発声器ヲ練習シテ容易キ歌曲ヲ唱フルコトヲ得シメ」⁶¹と発声器の練習も留意点とされている。あまり経験もなく実施間もない唱歌において、生徒の発声は全般に拙いものであったと思われる。中川の『日記』をみると6月3日視察の東磐井郡大原尋常小学校3年の唱歌についても「不完全漸々改良スヘキ見込アリ」と記されており、7月18日視察の秋田県土崎高等尋常小学校4年女子の唱歌については「長クシテ叫ブノ弊アリ」と記されている。

③ 女教員低学年適職論

次に中川は、低学年生徒の教育は女教員が適している」と述べる。その理由として「女子ト云フモノハ能ク注意周到ニ、綿密ニ、天性備リテ居ルコトゴザリマスカラ、生徒モ女ノ教師ノ云フコトハ承ルヤウデアリマス、サウシテ規律ヲ厳肅ニスルヤウテ誠ニ穩カナル所カアルカラ、誠ニ良イコト、思ヒマス、下ノ級ニ男ノ教員ノ教ユルノヲ今日モ外テ見マシタカ男ノ教員ハ仕方カナイ、ドウモ一年生アタリノ小サイ女ノ小児ヲ取扱フニハ不器用デアル、ドウシテモ甘クヤルニハ女ノ教員ヲ用ヒタラ宜シカラウ」⁶²と演説している。なお女教員適職論は森文相の持論でもあり、⁶³また中川の意見でもあったであろうが、先程の盛岡第一尋常小学校の記録からも、学校現場の視察によって一層痛感されたものと思われる。

④ 算術授業の批評

次に中川は「数ノ数エ方」について「夫レカラ外ノ学校テ見マシタ時ニ一年生ノ数ノ数エ方ヲ教ヘテ居ツタカ、児童ハ己ニ余程能ク知ツテ居ル、斯ノ如ク発達シテ居ルナレハ数エ方ノ順序ヲ経ルニ及ハン、前キニゾンへ進メテ行ク方ハ良カラウ、順序ニ拘泥シナイテ良カラウ」⁶⁴、「又三年生ニ算術ノ問題ヲ課シテオリマシタニ、紙ヲ買フヤウナ問題テ…紙ハ何枚アルト云フヤウナ問ト思ヒマシタカ、ソコテ生徒ノ答ヲ書ヘテオル所ヲ見ルニ、個ト厘ト云フヲ書テ居リマシタ、厘ト云フコトハ銭ノコトデアリマセウガ、ツマリ斯云フマチへ」の答ヲナスノハ未タ充分ニ問題ヲ解サナイカラテアル、夫レテ能ク題ヲ解サセナケレハナラヌ、

題ヲ解サシテ而シテ後其結果トシテ出来ル所ノ積ハナンデアルカト云フコトヲ吞込マセ子バナラヌ」⁶⁵と批評している。これも主として盛岡第三尋常小学校の視察にもとづいての指摘であった。『日記』に同校での視察の様子が記録されているが、1年の「数方」について「○児童ノ己ニ発達シタル者ニ付数フル時ハ餘リ長ク順序ヲ経ルニ及ハサルベシ」と、また「第三年生算術問題乗」について「○問題ノ意ヲ解セサルモノ多シ」とあり、日記の記述と演説内容が一致している。

中川の『日記』中、算術授業についての記述は極めて詳細である。数の数え方、加減乗除の四則計算、分数、位取、比例、利息計算、暗算、珠算、開平、幾何など授業内容に関する簡単な記述もあれば「第四年算術暗算 $a \ 125 \times 25 \div 17$ 問題ニ作ラシム a 良シ」(6月19日 大野尋常小学校)、「全(尋常…引用者注) 第二年生 算術 ウマウシ二千四百六十五疋ウマ引千九百八十七疋」(7月3日 北海道創成学校第二分校)、「全(高等…引用者注) 三年算術 比例 三百五十箱 八十七円五十銭 一千箱ノ代幾何」(7月14日 秋田郡大館高等尋常小学校)と問題そのものの記録も少なくない。

また算術については特に授業法についての批評が詳しい。6月16日視察の北閉伊郡小本村尋常小学校においては3年と4年の算術がおこなわれていたが、「算術ハ好ク題意ヲ解セシムルヲ要スト注意ヲ与フ」と、6月20日、軽米尋常小学校においては4年の算術は「珠」算による「除減加」、3年の算術は「筆」算による「加」についておこなわれていたが「先ニ方法ヲ問フヘシ注意」と記されている。また7月10日、青森県南津軽郡黒石高等小学校の視察においては「第四年級算術利息算 説明明瞭ニシテ親切 生徒善ク了解 運算早シ」と、また同日視察の黒石尋常小学校においては、男子3年(丙)の算術について「乗、珠」と乗法の珠算がおこなわれていたようであるが、「説明ヲ後ニスヘキ? 前ニスルトキハ或ハ早合点スル者ナキヤ」と授業のやり方について批評を付している。また7月17日、秋田県旭尋常高等小学校においては、尋常4年(乙)の算術について「六百七十二時ヲ暦法ニ命ス暦法ノ説明充分ナラサル為カ生徒善ク解セサルモノアリ」と教師の説明が不十分であると指摘している。

⑤ 図画と習字

中川は次に図画について述べる。「ソコテ今日見マシタ所ニ先ツク様ナ土瓶ノヤウナモノヲ書キマスルニ、一部分カラ黒ク書キ立テ、行クモノガアリマシタ、(尤モサウデナイ人モアツタガ) コレト云フモノハ大体ニ

先ツ輪廓ヲ書イテソレカラ中部分小部分ト行キテ、夫カラ濃淡ノ所ニ移ルト云フコトハ順序テアルト思ヒマス」⁶⁹と述べている。図画についても盛岡師範学校高等科四年の図画（毛筆画）を視察「毛筆画ハ此級位にて漸ク出来るものなり、毛筆画ハ純粹の日本風ヲ好シトスル故なり」と記していた。盛岡高等小学校2年の図画についてはassezと評価、岩手尋常中学校第5級の図画も視察しているが、上記の指摘は主として盛岡第三尋常小学校の視察のもとづくものであった。すなわち同校4年の図画について「○図画ハ全体ノ輪郭ヲ画キ後ニ濃淡ヲナスヘシ」と『日記』に記しているのである。

次に習字について考察する。習字に関して中川は、ひとつは実用という点から細字練習の必要を主張する。「夫レカラ習字ヲ見マシタガ、大変大キナ筆テ字ヲ書イテ居リマシタガ去ル十九年中テアリマシタカ細字即チ一寸五分位ニ書クガ良イト云フコト私ガ唱ヒマシタガ方々ノ賛成ヲ得マシテ今日ハ殆ント大概其位ニ書イテアリマス、然ル所ガコチラテ見マスト大キナ筆テ半紙ニ四ツ字ヲ書イテ居リマス、随分コレカラ懸腕直筆ヲ学ヒ而シテ書家ニテモナロウトイウナラ良イカ知レマセンガ、実用ニ適スル方ニハ少シ字ハ少サイ方カ良イ」⁷⁰と述べている。

これも盛岡第二尋常小学校4年の習字を視察し「大字 温泉へ御同行致度ク」と内容が記されたあと「○習字手本ヲ以テ細字ヲ習ハスベシ 他ニテ好結果ヲ見タリ 大字ニ過クルカ如シ」「第三年生習字 前同断」と記されており、同校の視察に基づく指摘であることが確認される。

また硯の置き方についても注意がなされている。「ソレカラ又習字ヲヤツテオルニ生徒ハ懸腕直筆所デハナイーツノ狭イ机ニ二人並ヒテ、大キナ硯箱ヲ二ツ並ヘテ居ルカラ、半分位シカ草紙ハ掛リテ居ラン、斯フ云フ所ナトハ少シ注意シテ硯石タケヲ置クトイフコトニスルト、大層配置方カ能クナツテ来ルカラ、少シコウ云フ所ニハ注意シテモ宜シカラウ」⁷¹と演説している。これも盛岡第二尋常小学校について『日記』に「○机甚タ狭クシ硯箱ヲ二ツオクヘカラス之ヲ改正スル迄ハ硯ヲ壺箇トシテ隅々ニ互ニ使フベシ」と記されており、演説内容と全く一致している。同校については2年の習字について「赤板ニ書ス」「裸体硯ヲ用フ」などの記述もある。

⑥ 規律および掃除、宿直について

掃除については小使などに任せないで教員と生徒と協力しておこなうことを勧めている。次に「夫カラ当

直ナドモ校長始メ教員モ宿ツテオリマス、勢ヒ県立学校又ハ町村立学校ニ至リマシテモ是等ノコトハ充分ニヤラレンコトヲ希望致シマス」⁷²と述べているが、仙台の第二高等中学校を例に引いて演説している。中川は5月26日、仙台の第二高等中学校を視察し、当日の『日記』に「教員職員皆交々宿直スル如キ頗ル感心ナリ事務員ハ幹事一人ヲ除クノ外武三名ノ雇員アルノミ他ハ教員ニテ之ヲ兼勤セリ」と記していた。またこの日6月10日の日記にも「○教員自カラ生徒ト共ニ掃除スヘシ 小使ハ一人トスベシ 他学校ニ於テモ書記小使等成減スヘシ 第二高等中学校ニテハ校長始メ教員一同宿直ヲナス 事務員ハ幹事ト雇二三名ノミ 経費ハ四万余円」と記されており、主として第二高等中学校の事例について、演説の控えとしてメモしたものであることがわかる。このように中川は、演説においては、視察したさまざまな学校の実例に基づきながら演説をおこなっていることが確認されるのである。

まとめ

以上、本稿は20日間に及ぶ中川の岩手県内の学校視察と演説について考察した。最初にも述べたように岩手県においては特に山間部や海岸地方など僻地の学校にまで足を踏み入れ丹念に視察した。したがって校舎施設・設備、学校規模、学級編成、教師の資質、生徒の状況などあらゆる面において教育条件に恵まれない、僻地的様相が浮き彫りにされる結果となったことが指摘できよう。そのことは岩手県に続いて視察する青森県や北海道の場合についてもあてはまるようである。青森県と北海道の巡視の模様については次の考察課題である。

註

- (1) 拙稿「明治24年における中川視学官の第二地方部学事巡視の研究——その1・宮城県内の巡視行程を追う——」(『弘前学院大学地域総合文化研究所紀要 第4号』1992年8月)
- (2) 『岩手学事彙報』223号(明24・5・3)「中川視学官」2頁
- (3) 『教育時論』220号(明24・5・25)に「第二地方部担任の中川視学官は、本月上旬当地方へ来らるべき旨其筋より通知有りしが、事故出来宮城県より飯京に付、今回は出張せられざる由なり。」(『岩手県通信』33頁)とある。
- (4) 『奥羽日日新聞』4152号(明24・4・30)に「学事視察として一昨日来仙されたる中川元氏は昨日より各学校を巡視さるべき予定なりしも何か急用起りしと見え東京より電報ありしを以て俄に昨日の第一列車にて帰京されしが近々更に来仙の筈なり」(「中川視学官」3面)との報道がある。
- (5) 『岩手学事彙報』225号(明24・5・15)「雑報」欄に「中川視学官 第二地方部巡視として来県せらるべきの処、宮城県に於て突然病気の爲めに帰京せられたる由」(26頁)との記事がある。

- (6) 注(3)と同じ 33頁
- (7) 『教育報知』131号 (明21・8・11)「文部省視学官ニ望ム」3頁
- (8) 『教育時論』215号 (明24・4・5)「視学官をして普く学校を視察せしめよ」7頁。なお同誌276号 (明25・12・15)に「視学官に非ず聴学官なり」との記事があるが、それも同様の趣旨である。
- (9) 『北海道教育会雑誌』5号 (明24・7・25)「中川文部視学官の演説 会員石川直治速記」8頁
- (10) 中川浩一「文部省視学官——明治二十四年・岩手県内巡視の足どりを追う——」(『茨城大学教育学部紀要』36号 1987・3)
- (11) 『岩手学事彙報』231号 (明24・7・15)「佐沼小学校の概略」29～30頁
- (12) 『岩手学事彙報』231号 (明24・7・15)「西磐井郡」31頁
- (13) 『日本の学校』(勝田守一・中内敏夫著 岩波新書 1964)には明治以降の「西欧化」方針の国内版とも言うべきモデル校参観の流行、そこにみられる日本の教師の「比較教育学的思考法」と関心の高さ、その結果として一般に他国や他校の事情に詳しく自国や自校のことに疎い傾向がやや自嘲気味に指摘されている。(59～63頁参照)
- (14) 『宮城県教育百年史 第一巻』(宮城県教育委員会編 ぎょうせい) 230～3頁
- (15) 『エリアマップ 岩手県』昭文社パンフレット 3頁
- (16) 『明治以降教育制度発達史 (以下「発達史」) 第三巻』85～6頁
- (17) 『大日本教育会雑誌』105号 (明24・4・15)「小学校設備標準ノ発布ニ付 (文部省参事官) 某氏談話ノ大意」271～2頁
- (18) 『大日本教育会雑誌』43号 (明19・11・16)に「中川視学官演説并復命書ノ一斑」が掲載されているが、その中に次の記述がある。「又小学校教則ニツキテ当局者ノ一時困難ヲ告クルモノハ単級教授ノ方法ニシテ該地方既設ノ校舎ハ大抵毎級教室ヲ別ニ俵令一室二三人ノ生徒ト雖モ必ス一人ノ教員ヲ置クノ慣習ナレハ校舎ノ狭隘生徒数ノ僅少ナルニ比スレハ教員ノ数甚タ多シ然ルヲ慣習ノ久シキ今俄ニ之ヲ改メ単級教授ノ法ニ廻シメントスルモ第一校舎ノ構造分級ノ法ニ廻レヲ以テ其室甚タ狭ク其最も狭キハ拾人以内ヲ入レ其最も広キモ四拾名内外ヲ入ルニ止マリ如此広キ室ハ稀ニ在ル処ナリ未タ六拾名以上ヲ入ルヘキ教室アルヲ見ス」(37頁)
- (19) 『岩手学事彙報』220号 (明24・3・25)「盛岡市事務報告書 (承前)」21～2頁
- (20) 同上誌 229号 (明24・6・25)「江刺郡」29頁
- (21) 『発達史 第三巻』85～6頁
- (22) 同上書 119～20頁
- (23) 『岩手学事彙報』222号 (明24・4・5)「小学校設備標準則発布の理由」21頁
- (24) 『日本近代教育百年史 4 学校教育 2』(国立教育研究所編 1974) 65～7頁参照
- (25) 『教育時論』232号 (明24・9・2)「小学校の設備につきて」8～9頁
- (26) 同上誌 281号 (明26・2・5)「小学校建築に関する文部の通牒」29頁
- (27) 同上誌 294号 (明26・6・15)「耳を払って聞け文部の当局者 (承前)」6～7頁。なお記事には、同誌284号掲載の「社説文部の彌縫策」も同様の趣旨であるとして転載紹介されている。
- (28) 『発達史 第三巻』86頁
- (29) 『教育時論』215号 (明24・4・4)「時事寓感 学校教師の住宅」7頁
- (30) 同上誌 216号 (明24・4・15)「社説 学校教師の住宅」5～7頁
- (31) 拙稿「森文政期における修身科口授法の採用とその教育観的背景」『弘前学院大学・短期大学紀要』第20号 1984・3
- (32) 拙稿「明治20年代における修身科廃止論と特設論の展開」同上『紀要』第26号 1990・3
- (33) 注(30)と同じ
- (34) 『大日本教育会雑誌』112号 (明24・12・18)「大日本教育会提出問題ニ対スル意見 三刀谷扶綱」210頁
- (35) 拙稿「明治中期における『終始級持』制支持の論拠と背景」(『弘前学院大学一般教育学会誌』第4号 1984・3)において私は、当時教員の学級担任持ち上がり制度が支持された背景には寺子屋への郷愁と教員移動の弊害についての認識があったことを指摘した。
- (36) 『教育時論』280号 (明26・1・25)「学校教師住宅の必要」12頁
- (37) 『発達史 第三巻』119～20頁
- (38) 『埼玉教育雑誌』148号 (明29・1・5)「単級教授法大要 (承前) 湯浅虎五郎」10～11頁
- (39) 注 (36) と同じ 12頁
- (40) 『発達史 第三巻』58頁
- (41) 同上書 110頁
- (42) 同上書 109頁
- (43) 同上書 111頁
- (44) 鈴木博雄、坂本保富、麻生千明「明治期文部官僚における教育認識と政策形成——初代文部省視学官中川元の事例を中心として——」『筑波大学教育学系論集第3巻』(1978・3)において私は、特に学級編成との関連において中川の巡視と演説について考察し、このことは指摘した。
- (45) 『教育報知』545号 (明30・4・26)に「生徒往復看護法に就テ 埼玉 霊山」との記事があるが、授業時間以外の休み時間や放課後、下登校時において生徒集団に組長、副組長などを組織して自治的行動を育成させることの教育的意義が述べられている。なお岩波新書『日本の学校』(前掲)には、いつからともなく慣行として定着していった生徒の集団登校が、日本人の集団主義、共同体的秩序の再生産機能を担ったことが指摘されている。(71～3頁)
- (46) 『教育公論』197号 (明30・7・20)「有学無学取調」15頁
- (47) 『発達史 第三巻』42頁
- (48) 『教育時論』107号 (明21・4・5)「社説 簡易小学校」5頁
- (49) 『岩手県史 第10巻 近代篇 5』491～2頁
- (50) 『発達史 第三巻』39頁
- (51) 『教育時論』112号 (明21・5・25)「温習科亦必要」10頁
- (52) 『岩手学事彙報』221号 (明24・4・5)「盛岡市事務報告 (続)」26～7頁
- (53) 『教育時論』232号 (明24・9・25)「岩手県東磐井郡に於ける舊時の学校」24～5頁。なお芦東山については笠井助治著「近世藩校に於ける学統学派の研究上」(吉川弘文館昭44)にも「芦野東山」として紹介されている。(157頁)
- (54) 『岩手学事彙報』225号 (明24・5・15)「気仙郡」34頁
- (55) 『東京若菜会雑誌』106号 (明24・11・20)「宮城県学事景況 諸井くま子」14～5頁。
- (56) 『発達史 第三巻』57頁
- (57) 『世界教育史大系34 女子教育史』(梅根悟編 講談社 昭52) 267～8頁
- (58) 『岩手県史 第10巻 近代篇』490～1頁
- (59) 『岩手学事彙報』229号 (明24・6・25)「江刺郡」29頁。また中川の『日記』の末尾メモにも「水沢ヨリ汽車ニテ盛岡ニ達ス泊ス」とある。

- (60) 同上誌 228号 (明24・6・15)「中川視学官」24頁
- (61) 『岩手学事彙報』228号 (明24・6・15)「岩手教育協会総集會」25頁
- (62) 同上誌 230号 (明24・7・5)「岩手教育協会総集會に於ける中川文部省視学官の演説」25～7頁。なお中学生徒に関するこの演説部分は『教育報知』280号にも「中川視学官中学説。」と題して掲載されている。
- (63) 同上誌 231号 (明24・7・15)「岩手教育協会に於ける中川文部視学官の演説 (承前)」22～3頁
- (64) 『岩手学事彙報』224号 (明24・5・5)「風琴購求」28頁
- (65) 注(59)と同じ
- (66) 『発達史 第三卷』100頁
- (67) 注(63)と同じ 23頁
- (68) 『森有礼全集 第一卷』(宣文堂)に森の各地での演説が掲載されているが、それらをみると森は女教員適職論者であったことがわかる。例えば明治20年2月、九州巡回中に、女教員養成の必要を述べ、「蓋シ女教員ノ親切ニシテ注意ノ周到ナルハ決シテ男教員ノ及フ所ニ非ズ、殊ニ其幼稚ノ児童ヲ教育スルハ男子ヨリモ大ニ優レリトスルハ、欧米ニ於テモ既ニ通論ト成リタル程ノ事ナレバ、尋常小学校ニテハ

成ヘク女教員ヲ用ヒタキモノナリ、是レ女教員ノ学力ヲ薄トシ之レニ幼稚生徒を托セントノ意ニアラス、幼稚者ヲ教育スルハ至難至重ノ事ニシテ特ニ女子ノ長所ニ係ルカ故ニ之ヲ女教員ニ托セント欲スルナリ」(497頁)と演説しており、また明治20年6月、福島県議事堂においては、「終ニ女教員ノトニ付キ聊カ演フヘシ、小学校教員殊ニ下級生受持ノ教員ニハ適當ナル女子ノ出ツルヲ俟テ之ヲ採用スルヲ緊要ナリ、抑女子ノ天性ハ最モ児童ノ教師タルニ適シ、周到ニシテ親切ヲ極メ学校ニ入ラサルノ前ハ殆ント女子ノ手一ツニテ児童ヲ教養ス、之ヲ天然ノ教員ト称スルモ可ナリ、」(550頁)と演説している。

- (69) 注(63)と同じ 24頁

(1992年11月20日稿了)

*付記 『岩手学事彙報』など、岩手県関係資料の収集については岩手県立図書館を利用させていただいた。また中川視学官のご令孫である中川浩一氏よりは『巡視日記』の拡大コピーを送付していただいた。あらためて原資料で確認することにより、かつておこなった解説の誤りを発見した部分も少なくなかった。この研究も、そうしたご厚意に支えられているものである。